

ギリシア古典の伝統における忍耐の代表的人物像とプラトンの解釈

——忍耐観の比較研究のための基礎的考察——

石井雅之（倫理文化研究センター専門研究員）

はじめに

生きていくうえで、苦難に直面しない人はいないように思われる。苦難は、当人が事態をどう受けとめるかによる差違を含みつつ大小さまざまなものとして立ち現れる。物的・経済的条件、自然的条件、社会的条件、人間関係、身体の状態等、さまざまな要因が苦難をもたらす。たとえば、食糧難、経済的困窮、旱魃や大地震などの自然災害、種々の差別や制度の不備、いじめ・虐待・ハラスメント、病気、事故による怪我等々多様であり、より具体的にとらえれば数えきれないほどである。それらはただ当事者にとって苦難であるにとどまらない。大切な誰かが苦難のさなかにあることは自分にとってもやりきれない苦難となるのであり、愛する相手の死は自らの受苦以上に耐えがたい苦難となる。種々の苦難の中には比較的容易に乗り越えられる小さな苦難もあれば、全力で対処してもなかなか克服できない苦難、あるいは克服不可能な苦難もある。

そこで、そのように人生に付きものである種々の苦難に対して、どう対処するのがよいのかが当然問われてくる。その問いに対して、苦難に対する「立派な態度」が思い描かれたとき、そのような立派な態度をいつでもとれる状態ないし力は、人間にとって一種の「徳」だとみなされる。

しかしながら、どのような態度を立派だと評価するかについては、全面的に意見が一致してきたわけではない。また、苦難に対する態度としての徳がただ一つの徳目概念で把握しきれると考えられてきたわけでもない。

日本語の語彙でいえば「忍耐」ないし「忍耐強さ」をその代表としうる概念は、諸々の文化・時代において、苦難に対する態度・能力としての徳の候補の一つとされてきたものといえようが、一般に、「忍耐すること」や「忍耐しようとする態度」には賛否両論が生じることも事実である。賞賛される場合もあれば、否定的に評価される場合もある。

では、忍耐できることが「徳」とみられるのはどのような理由によるのか。また、一口に「忍耐」と言っても具体的な事態としては一様ではないわけだが、何らかの観点から種別が可能だとすれば、どのような種類の忍耐、どのような特性を伴った忍耐をできることが「徳」と呼ばれるのか。本稿は、これらの点に関する思想の特殊研究となる西洋伝統諸思想の比較研究の一環として、ギリシアの古典思想の忍耐観の形成・継承・展開を、現存文献上注目すべき箇所にもとづいて浮かび上がらせる試みの一部である。

ところで、忍耐の評価は、ただ理論的・抽象的になされるのではなく、忍耐する者、とりわけ忍耐した代表的な人物の在り方を吟味することを伴っている。当人が与る文化・教養における忍耐の代表者の心理分析及び人物評価が、その人のなす忍耐評価に反映すると言っても過言でないと思われる。ギリシア古典の伝統においてもやはり忍耐の代表的人物として受けとめられ、語り継がれていった人物がいたとみられる。以下、そのような人物としてオデュッセウスとソクラテ

スという二人を取り上げ、その人物像を、彼らの忍耐を伝えた基礎的テキストを要覧するとともに、その忍耐理解に影響を及ぼしたとみられるプラトンの解釈に若干の分析・考察を加えることによるかぎり、素描的にとらえてみたい。